

「思い出」を未来に反復する人

野村俊第三詩集『うどん送別会』に寄せて

鈴木比佐雄

1

野村俊さんは、少年の頃の感受性を宝物のように生きている人だ。人はなぜ教師になろうとするのか、という問いがあるなら、野村俊さんの詩篇を読んでみて欲しい。教師になるために最も大切な資質が分かる気がする。それは様々な教科書の知識を与えていく能力だけではなく、子どもが家庭や社会環境によつて存在の危機に陥っている時に、寄り添い、共に悩んであげる人間的な優しさを伝えて子どもも生きていくことの素晴らしさのことも知れない。子どもたちを管理する上からの目線ではなく、野村さんのように子どもと同じ目線で、子どもの心を語ろうとする詩人がいることに私は驚かされた。また心底から子どもたちへの

慈しみの心が詩行から溢れていることも、野村さんの詩の特長だろう。子どもたちが野村さんを必要としているように、野村さんも子どもたちの心が必要なのだということを自然に語っている。第一詩集『迷子と恋人たち』の中に詩「保健室」があり、野村さんの子どもたちとの交流がよく記されているので引用してみる。

保健室

おまわりさんに追いかけられて
お店の人に殴られて
先生に叱られて
父に怒鳴られ、兄に叩かれて
行く所がなかったという
身も心も打ちのめされた少年が
体育館の後の倉庫でシンナーにふけた
ひとりビニールの袋の中に
頭をいれてうずくまっていた
幻覚が欲しかった……

そいつだけがぼくにやさしいんだよね

母がいない少年は

半ば意識を取り戻して保健室の椅子に座つてい

た

そして、うつろにとりとめもなく

幻覚の中で出会った母の面影を語っていた

シンナーの幻覚の中でしか母に会えないんだよ

ね

彼はそう言つて涙を拭いた

春先の陽はあたたかく窓から入り込み

ストーブの上の薬缶の湯がなよやかに湯気を上

げ

眠たくなるような静けさであった

そんな静かなひとときに

もうひとりの少年がやってきた

三日後に卒業する彼は窓辺に寄りかかって

ぼんやり校舎の裏庭を見ていた

もう少しだから……

学校をもう一度全部見ておきたかったから……
それから授業が始まって動こうとはせずに
いつまでもいつまでも黙つて
そこにいた

ぼくは黙つてストーブに手をかざしていた

そこに居続けることが大切だなんて

そんなことを思つたわけではないが

ぼくに何が言える？

どこかへ行つて何かをしなければならぬ

そんな重要な仕事があるわけでもない

なんとなくぼくは彼らが友達に思えた

ぼくにも保健室が必要だった

寂しいということも

病気なのだ

父や兄からも疎まれて傷つきうずくまり、どこにも行き場のない「母のいない少年」がいる。そして最後の聖域としての保健室の中に逃げてきた。緊急避難所の中で生徒と教師が心をさらけ出

し合つて、今を耐えていく姿がこの詩には描かれている。「ぼくに何が言える？」と少年の寂しさや悲しみを理解することは出来ないのだが、その少年を心から心配している人間がここにいることを野村さんは無言で伝えている。そのためには他の仕事を断念しても子どもと一緒にいることが最も優先されるべき「重要な仕事」だと考えている。一緒にいることによつて「ぼくは彼らが友達に思えた」と感じてしまう。野村さんは、そんな本来的な人間の在り方に忠実に、しかも自然に従うことを実行してきたのだろう。

詩集の冒頭近くにある短編小説のような散文詩「釣り」によると野村さんは、「父のいない少年」だった。そのため母と一緒に祖父のいる島根県隠岐に身を寄せていた。野村さんは小学校五年生の時に仲間四人で、「一番怖くない親爺」である漁師の小舟を無断で借りて釣りをした。その漁師とも言える釣りの場面はとても生き生きと描写されている。戻ってくる時と首謀者の野村さんは、親爺に代表として一人だけ殴られた。家でも

母と祖父から叱られて美味しいおかずももらえなかった。村の大人たちは野村さんのことを「悪たれシユン」と呼んで陰口を叩かれ近寄つてもこなかった。野村少年は祖父に告げ口をした親爺の家の西瓜の中身をストローで吸つたり、キュウリを盗んで食べたり、田んぼに大きな石を投げ込んだりして、「ぼくをひややかに見る者たちの家」に復讐をした。そんな疎外感を抱いていた野村少年は、校長先生と担任先生からも悪戯をきつく叱られた。その一部始終を見ていた三年生の時の担任教師は、「誰もいなくなつた職員室で黙つてぼくの頭を抱えていてくれた」という。その時に自分の涙が温かいことを感じた。後に野村少年は千葉県八街市周辺の教師になり、中学校、小学校の校長や幼稚園の園長などを勤めた時に、きつとこのような「寂しい少年」の心情こそが子どもたちとの交流に最も役に立つたのではないだろうか。そのような意味で野村さんの詩の魅力は、世代や立場を超えて子どもたちを含めて人間の存在の危機を察して、その存在と寄り添つていく真の優しさを

を秘めた詩なのだと思う。

2

野村さんの第一詩集『迷子と恋人たち』は九十篇以上あり、また第二詩集『四季の詩』あのねのワルツ』は六十篇以上収録されている。野村さんには学校生活で得た有り余るほどの詩のテーマがある。その場面にすつとタイムスリップして心を遊ばせて、その時の子どもたちとの共有した時空間を宝物のように語り始めるのだ。小学校一年生の子どもたちの天真爛漫さを描いた「小学校の宇宙人」では、人間の本来持っている素直な好奇心が、大人たちを驚かせ、またどんなにか「生きる原点」になるのかを物語っている。また散文詩「だるまさんがころんだ」では、校長室で書類に目を通すのに飽きて、二年生の教室を通りかかり、下校時の子どもたちから声を掛けられて一緒に「だるまさんがころんだ」をすることになった。「廊下で遊んではいけない」というルールを破つて大騒ぎしていたこともあり、上の階で会議

をしていた担任教師から、「みんなでそこに立っていないさい！」と言われてしまう。子どもたちは「しゅん校長先生はうちの友達だ」と思ったらしく、しばらく楽しそうに立っていた。十五分ほどしてやってきた担任教師は、小さくなつて俯いていた校長を見て「やあだあ、もう。校長先生ったらあ。」といつて笑い、逆に恥ずかしそうにしていたという。野村さんの行動原理は、いつも子どもたちの側に立つて学校を生き生きとした場にしようと願っていたのだろう。だからこのような型破りの行動が自然と行えたのかも知れない。詩集の中で「小学三年生のさゆりちゃん」という詩がある。この詩を読むと野村さんの人生観や価値観を感じさせてくれるので、引用してみる。

小学三年生のさゆりちゃん

園長先生……

冬のお庭に溢れる光

背中で揺れるランドセル

こぼれて咲いている笑顔
あの あの

ずっと前にいつも登ってきて
抱っこしていた

あの笑顔……

小学生になっちゃった

あのさゆりちゃんが走ってやってきた

もうぼくの肩ほども

伸びた背丈があるのに

どうして登ってくるんだよ

どうして抱っこなんだよ

ほうら 見てごらん

まだ五才の妹のえみちゃんも

いっばい いっばいの

幼稚園の子も

みんな不思議な顔して見ているよ

ううん いいの

懐かしいんだもん

じゃあ さゆりちゃんは
まだ幼稚園の年少さんだ

違うよ もう三年生なんだよ

漢字もいっぱい書けるし

英語も知ってるよ

運動会だって一番になったよ

鉄棒の逆上がりだってもう出来るし

でも でも でもさ

まだこんな風に赤ちゃんじゃないか

園長先生に抱っこなんかされて

だって 懐かしいんだもん

ねえ 園長先生

懐かしいってなんだろう

懐かしいってなあに？

心が疲れているんだよ

いいさ いいさ

おじいさん園長先生の胸で

ほんの少しだけだけでもさ

心の疲れが取れるなら

懐かしく休んで行きなよ

やさしい思い出に抱かれて

揺れて行きなよ

思い出ってやさしいね

思い出って大好き

今 園長先生に抱っこされているのも

思い出だよ

そうだよ

たえ小学生だってさ

学校でみんなの中にいるってことは

もうそれだけで戦いだから

もうそれだけで傷つくことだから

この詩には野村さん自身が子どもたちから「思

い出」としての存在であることを知らされ、その

役割がたえ小学三年生であっても、精神的なス

トレス状態においては重要なものであることを

語っている。そして野村さんはこの「思い出」こ

そが人間が生きていく上で最も大切な生きる力に

なることも暗示している。少女が精一杯努力して

何でも一番になるという価値観の中で生きること

に疲労し始めた時に、立ち返って来る場所こそが

「思い出」を体現している園長先生だったのだろ

う。野村さんはこの役割を天職のように生きてき

たのがこの詩篇によって明らかに。例えば次の詩行などは野村さんの詩思想が普遍性を持っていることを示している。「懐かしいってね／思い出の中に／心が入っちゃうことだよ／時間を戻って来ることなんだ／懐かしいって／幼稚園にいたときの／あの楽しかった気持ちに戻ることもなんだよ／／思い出ってやさしいね／思い出って大好き／今 園長先生に抱っこされているのも／思い出だよね。「懐かしい」という心の作用が人を幸福にさせる良き心の作用になると捉えている。ここで私が連想させられるのはキルケゴールの代表的な著作『反復』で論じられている「追想」が、野村さんの「懐かしい」という心の作用と重なっているように思われる。キルケゴールは、「追想」が後方にされると過去の悲哀に浸らせて人を不幸にするが、前方という未来へ「追想」がなされると人を幸福にさせるといふ。そんな前方への「追想」を「反復」といって積極的な人生のテーマとして展開していく。野村さんがキルケゴールを読んでいたか分からないが、この「時間を戻るこ

と」や「思い出ってやさしいね」という心の作用は、「人生は反復である」というキルケゴールの根本的な思索を体現し生きているように感じられた。その意味でも野村さんの詩篇は誰が読んでも分かりやすいだけでなく、しなやかな強靱さに裏打ちされた人生を見通す詩思想に貫かれているように考えられる。

3

新詩集『うどん送別会』はプロローグの詩「置き手紙」と八章七十一篇の詩から成り立っている。「置き手紙」の冒頭の詩行は次のように始まる。

みなさん

「思い出」はもう過ぎ去ったことだと

思っていますか？

それは違います

過ぎ去った時間は決して戻ってはいきません

けれども「思い出」は、ふと心の中に

あのときとは違う感慨で

戻ってくるではありませんか

野村さんは自らの詩集を「自分史」だとエピソードで語っている。そしてこの第三詩集によって「自分史」は完成したとも言っている。それだけの覚悟をして書かれた詩群は、幼少の頃から始まり現在の心境を伝える一人の教師であった詩人の感受性を赤裸々に「反復」している。またその回想の仕方には教師時代の子どもたちを見詰める視線も重ねられている。一章「思い出への旅・ひとり」九篇は、隠岐に暮らした小学校時代の孤独な「思い出」が、村の懐かしい風景と共に語られている。二章「遠くへ行きたい・青春」十一篇は中学・高校などの学生時代のこと記されている。一人であった野村さんは友人よって人と出会うことの喜びを感じるようになる。しかしその友人たちの内面もまた自分と同じように孤独を抱えながら悩み苦しんでいることを知る。恋心を抱く叙情的な散文詩もみずみずしい。三章「独り言のように・教師」五篇と交響詩「ゆめちゃん」は

一教員になった野村さんが大切にしていた「思い出」を語っている。生徒たちに語りかけていながら、実は自問していき自分が本当に納得していることだけを静かに伝えようとしている。また生徒たちの具体的な問いやもの見方に寄り添い可能な限り答えようと試みる野村さんの姿が見えてくる。四章「うどん送別会・心友」七篇は、この詩集で最も野村さんが伝えたかった、生きていくための最も大切にしたいことがちりばめられている。冒頭の詩「中学校長のつばやき」を引用してみる。

中学校長のつばやき

友人と語らう輪の中で

静かにほほえみ

ひっそりと後ろの方にいる

にぎやかさに紛れて

忘れられたように見えないけれど

ふと気がつく

目立たない場所など

一心に清掃をしている
鉢の草花に水をやり

落ちていた片方の靴をそつと戻し
散らかっている昇降口の置き傘を

ひとつひとつ整理している
それからそつと外に出て

きれいな空を見上げていて
黙って見上げている

そんな生徒を私は知っている

私の一日の仕事が

そんな生徒の幸せに

少しでも役に立っているのだろうか

ふと思うことがある

「校長室便り」から

いつも後ろの方にいる静かな生徒だが、目立たない場所を一心に清掃したり、散らかっている置き傘を整理したり、鉢の草花に水をやり、黙っ

二人の言葉の端々から多くのことを学んで、定年後に務めることになる幼稚園の園長の仕事に就くことの励ましを受けるのだ。野村さんの特質は、年齢を超えて一人の人として自然と接してその瞬間を良き出会いの時間に転化させてしまうところだろう。五章「シエークスピアの恋・旅」十二篇は、国内・海外の旅に触発されて書かれた詩篇だが、異なる風景によつて野村さんの内面が引き出されている。六章「白い思い出・相聞」十篇は、教師時代の生徒や関係者との再会の詩篇が中心になっている。七章「従妹のマリア・挽歌」六篇は、教え子、恩師、父など親しい者たちの鎮魂詩篇だ。最後の八章「私の終着駅・漂泊」十編は、母に寄せる詩篇が中心だが、これまでの「思い出」の果てに見えてくるものを遙かに臨んでいこうとする心境を記している。最後に八章の冒頭の詩「キリン」を引用してこの小論を終えたい。「思い出」を遙かな前方へ投げ出して生きようとする人びとにぜひ読んで欲しいと願っている。

て空を見上げている生徒の存在を野村さんは知っている。そんな生徒の幸せに果たして自分は役に立っているかと自問するのだ。眼に見えないが高貴な心を持つている生徒の姿を野村さんは追想し続けているのだろう。「うどん送別会」は二十五頁もの短編小説のような散文詩だ。野村校長は、よく校長室で昼寝をしたらしい。またギターで作詞作曲もしていたらしい。そんな型破りの校長だった。そんな校長時代に遠足で仲良くなった美少女のさおりちゃんと、野村さんの曲を合唱祭のオリジナル部門でピアノ演奏したともみさんの二人の少女との交流を記したものだ。野村さんが六十歳の定年を迎え退職した後に、高校三年生になった二人からさおりちゃんがバイトをしているうどん屋で野村さんの送別会を開くことを提案された。野村さんがうどん屋さんに行くときさおりちゃんはプロのように仕事をてきぱきとこなしながら、三人で「思い出」を語りながら、二人の将来の相談を受けて野村さんは人生の先輩として良きアドバイスをしていく。しかし逆に野村さんは

キリン

精いっぱい首をのばし

まるで背伸びをするようにして

動かずに

キリンは遠ざかる夕日を見ていた

遥かなまなざしは愁いを帯びて

お前は夕日に何を見ているのだ

一日が終わる

身も心も疲れて

鳥たちが帰るのを見ているか

疲れた翼をようやくはためかせ

遙かな空を

夕日を目指す鳥たちを

夜が明けると

東の光の方へ鳥たちは出かける

だから帰りは夕日に向かうのだ

『西』という字はな
巢の中に帰り着いた鳥の姿の
象形文字なんだ

そんな話を聞いたことがある

ぼくは夕暮れが好きだ

ぼくは『西』という字が好きだ

母の懐の感じがする

帰るところなのだと思っ

けれど、どうしてなのだろう

『西』という字は寂しいのだ

海のような揺らめきがあつて

波のような悲しさがある

望郷の念に黙して

木立の茂みより上に顔を出し

沈む夕日を見つめるキリンよ

アフリカのサバンナの夕日は

もっと乾いて大きな夕日は

野生の悲しさをどこかに滲えながら

お前を待っているだろう
お前を決して忘れはしないだろう

キリンよ……

いっしょに帰ろう

きつと

母が待っている

西の国へ帰ろう

野村俊詩集 『うどん送別会』 栞解説文

鈴木比佐雄

コールサック社

2011